謀略の影法師

日中国交正常化の黒幕・小日向白朗の生涯

著者の池田知隆さん

日中国交正常化の黒幕

――　本書は小日向白朗（こひなたはくろう）の波乱万丈の人生を描いた作品ですが、この人物はそもそも何者なのですか。

池田　白朗はとても一言では表現できない人物ですが、あえて言えば〝忘れられたアウトロー〟です。

白朗は1900（明治33）年に生まれ、17歳で単身満州へ渡ります。20歳のとき、馬賊の捕虜にされてしまいますが、めきめきと頭角を現して中国全土の馬賊の総頭目にまで昇りつめます。中国名は「尚旭東（シャオ・シュートン）」、中国の民衆からは英雄「小白竜（シャオ・バイロン）」と仰がれ、「アジアのロレンス」とも呼ばれました。白朗はまた日本軍の特務機関員として天津や上海で暗躍し、日中和平工作を行いました。

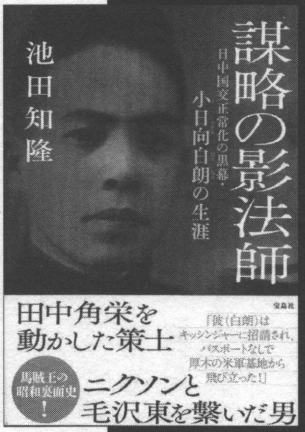
敗戦後は南京軍事法廷にかけられたものの釈放され、50歳で帰国します。戦後は自民党や右翼、CIAと人脈を持ち、米中国交正常化や日中国交正常化を支えました。

白朗の存在は『日本人馬賊王』『馬賊戦記』の著作によって、戦前に中国大陸を駆け回った〝馬賊王〟として知られていますが、戦後の足跡はあまり知られていませんでした。しかし、本書では白朗が戦後も重要な役割を果たしていたことを明らかにしています。

――　白朗の逸話は枚挙に暇がありませんが、印象的なものは何ですか。

池田　白朗による日中和平工作です。実は、1936年11月に関東軍と蒋介石との間で日中和平の密談が行われ、蒋介石は「日本とは戦争しない」と話していたのです。そして、交戦中の両者を仲介して会談をセットしたのが白朗でした。しかし、それから2週間後の12月に張学良が蒋介石を拉致する西安事件が起きて第二次国共合作が成立したため、白朗の和平工作は〝幻の合意〟に終わってしまいました。

白朗は1941年にも軍部の密命をうけ、日本側の責任者として蒋介石の側近と日中和平の秘密交渉を行っています。しかし、この交渉は日本側の別組織から妨害され、最終的には真珠湾攻撃によって中断してし



宝島社
1,980円

まいました。

失敗に終わったものの、白朗が日中和平のためのキーパーソンとして暗躍していたことは間違いありません。戦前の満州や上海は敵味方が入り乱れる摩訶不思議な世界ですが、白朗はそういう訳の分からない現実の中で持ち前の胆力や度胸、義理と人情で生き抜き、国際政治の大舞台で活躍していたのです。

こうした知られざる歴史を知ることは、本当にワクワクします。同時に、こういう重要な史実が歴史の闇に埋もれていたのは本当にもったいないことだと思います。

――白朗は米中国交正常化と日中国交正常化にも関与しています。

池田　白朗は1970年にキッシンジャーの要請で米国へ行っています。当時、ニクソン政権はベトナム戦争の終結を見据えて中国との交渉を始め、台湾問題を処理しようとしていました。そこで、中国・台湾に人脈を持つ白朗に白羽の矢が立ったのです。関係者によれば、白朗は厚木基地から米軍機に乗り、パスポートなしで渡米したといいます。

白朗は米国の国家安全保障会議（NSC）に出席して、日米中が連携してアジアの平和的建設を行うべし！と堂々たる提言をしています。日本政府は台湾ロビーの影響が強く、必ず米中接近を邪魔するとも指摘して米国側を驚かせたそうです。

帰国後、白朗は日本も独自の立場から中国と向き合うべきだと訴え、日中友好議員連盟の設立に関わりながら、田中角栄に積極的に働きかけました。こうした白朗の動きが田中政権による日中国交正常化を後押ししたことは間違いありません。白朗は日中国交正常化の黒幕だったと言っても過言ではないでしょう。

白朗は米中密約が結ばれ、日本の立場が損なわれることを恐れていました。現在も米中両国は激しく対立していますが、日本の頭越しに米中密約が結ばれるリスクは常にあります。白朗は「米国、中国の動向を侮らず、また侮られず、アジアにもっと目を開け」と言っていますが、いまこそ大局観を持って日本独自のアジア外交を目指した白朗のような人物が求められているはずです。

〝夢見る力〟を取り戻せ

――いまの日本には白朗のような人物がいなくなっています。

池田　白朗は自分の人生を「猿飛佐助であり、宮本武蔵であった」と豪語し、毛沢東や蒋介石のことを「毛さん」「蒋さん」と呼び、我こそは世界の大舞台で活躍する大人物だと自負していました。良く言えば気宇壮大で豪放磊落、悪く言えば誇大妄想の大ホラ吹きですが、こういうス

ケールの大きさや自己肯定感の強さには驚かされます（笑）。

戦前の白朗はまさに自己中心、自由奔放でした。しかし、戦後は国際政治のリアリズムの中で客観的な視点を獲得していきます。いわば子供から大人に成長し、天動説から地動説に転回していくわけです。だからこそ戦前の日中和平に失敗した白朗が、戦後の日中国交正常化に貢献することができたのだと思います。

――池田さんは白朗の人柄に魅かれながらも、軍部の手先になった点などを厳しく批判しています。

池田　白朗は「アジアは一つ」という夢を抱きながら中国大陸に渡り、中国名を持ち、中国の民衆とともに生きました。中国人女性と結婚して子供ももうけました。しかし、最後まで日本中心のナショナリズムを捨てることはできなかった。

白朗は日本軍と馬賊が対立した際に「血を吐く思いで、この歴史の悲劇に懊悩、慟哭した」と述懐していますが、白朗の人生は最後までアジア主義とナショナリズムの狭間で揺れ動きました。それはまさに近代日本の矛盾や葛藤を象徴するものだったと思います。

――池田さんは本書で〝夢見る力〟の大きさを強調しています。

池田　私は白朗から日本人の〝夢見る力〟を改めて教えられました。明治時代の青年には大陸に雄飛して、世界の大舞台で一旗上げてやるぞという夢やロマンがあったのです。

日本はバブル崩壊から「失われた30年」に突入し、未だに閉塞状況が続いていますが、日本が本当の意味で失ったのは〝夢見る力〟だったのではないかと思います。

確かに大きな夢は危ういものでもありますが、人々を力づけるものでもあります。むしろ、日本や国民が目指すべき夢をきちんと語らなければ、人々はカルト教団が唱えるような奇妙な幻想に流されやすくなってしまいます。私たちはいまこそ戦前の功罪を総括して、新しいアジア平和、世界平和の夢を思い描くべきです。白朗の生涯を描いた本書が現在の閉塞状況を打ち破り、日本人が〝夢見る力〟を取り戻すヒントになれば幸いです。

（9月30日　聞き手・構成　杉原悠人）

池田知隆（いけだ・ともたか）

1949年熊本県生まれ。大阪自由大学主宰。早稲田大学政治経済学部卒業後、毎日新聞に入社。大阪社会部、社会部編集委員などを経て論説委員。大阪市教育委員会委員長、追手門学院大学客員教授などを務めた。『団塊の〈青い鳥〉』（現代書館）、『日本人の死に方・考』（実業之日本社）など著書多数。